九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

振鷺亭と為永春水 ： 『擁書楼日記』の記述を中心に

大牟田，拓海
九州大学大学院 ： 修士課程修了生

https://doi.org/10.15017/3054022

出版情報：語文研究. 127, pp.30-47, 2019-06-25. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

振鷺亭と為永春水

――『擁書楼日記』の記述を中心に――

大牟田　拓海

はじめに

江戸後期の戯作者として知られる振鷺亭は、その没年に関してこれまで三つの説が提示され、そのいずれが正しいものであるか議論が重ねられてきた。次に挙げるのは、振鷺亭の没年を述べた辞書・評伝類である。それぞれの記述に依拠する形で三つの没年説が唱えられてきたのだ。

① 双木園主人『江戸時代戯曲小説通志』（明治二十七年〈一八九四〉刊）

振鷺亭（中略）晩年落魄して、川崎の近郷大師原村邊に寓し、手跡の指南をなし、僅かに口を糊せしが、一日泥酔して溺死したりといふ。時に文化四年（一八〇七）なりき。

② 狩野快庵『狂歌人名辞書』（昭和三年〈一九二八〉刊）

振鷺亭、名は貞居、通称猪苅與兵衛、東都本船町に住す、初め畫を鳥居清長に學び、後ち戯作者となりて草雙紙数部の著あり、晩年落魄し文化十二年（一八一五）十一月廿三日歿す。

③ 五車書楼主人著、大久保葩雪増補『増補続青本年表』（『新群書類従第七』所収、明治三十九年〈一九〇六〉刊）

文政二己卯年（一八一九）　雑記（中略）十月振鷺亭歿す、川崎驛大徳寺に葬る

いずれの文献も振鷺亭の項目について引用書目を挙げておらず、どのような資料を根拠にしているかは不明である。最も早い文化四年から最も遅い文政二年までおよそ十二年の開

きはあるが、振鷺亭の名前や遍歴、葬られた寺といったそれぞれの記述も、現在知られている振鷺亭の略伝と齟齬することはなく、これだけではいずれが真実であるとも断定しがたい。では、こうした諸説紛々たる状況において、先行研究ではどのような見解が出されてきたのだろうか。次には、三説のいずれを支持していたかに対応する形で、先行研究を表としてまとめた。なお、先行研究に付された番号は発表の順序を示すものである。

①文化四年（一八〇七）	1　山崎麓「振鷺亭と春水」（『江戸時代文化』二巻二号、一九二八年）
②文化十二年（一八一五）	5　棚橋正博「振鷺亭年譜考」（『読本研究』一〇・下、一九九六年） 6　『新版近世文学研究事典』「振鷺亭」（棚橋正博執筆、二〇〇六年）
③文政二年（一八一九）	2　神保五弥「振鷺亭と為永春水」（『近世文芸』七号、一九六二年） 3　棚橋正博「振鷺亭論――京伝絶筆以後の中本洒落本――」（『近世文芸研究と評論』十一号、一九七六年） 4　『日本古典文学大辞典』「振鷺亭」（棚橋正博執筆、一九八四年）

しかしそもそも、なぜ振鷺亭という一戯作者の没年をそこまで取り沙汰する必要があるのか。そこには、後に「二世振鷺亭」を名乗ることとなる為永春水の存在が深く関わってくる。

木村黙老『戯作者考補遺』（弘化二年〈一八四五〉序）に「戯名を初は二世振鷺亭といひ中比故人南杣笑楚満人が女に乞て二代楚満人の名を冒しぬ」とあるように、為永春水は一時期「二世振鷺亭」を名乗っていた。岩本活東子『戯作者小伝』（安政三年〈一八五六〉成立）には「初め式亭の門人に入て三鷺と号し、後二世振鷺亭と号す」ともある。またこうした戯作者の評伝類だけに留まらず、実際に為永春水が振鷺亭を名乗った事例も、現存している合巻作品の幾つかに見ることが出来る。

画工歌川国直子、予が振鷺亭に遊ぶ事有て、此冊子を出してはし書せよといふ。こは旧友春亭三暁が綴りし、春宵の一奇談なり。（中略）

文政四年／已春出板　二代目振鷺亭主人序（花押）

（春亭三暁『十種香萩廻白露（こうづつみはぎのしらつゆ）』文政四年〈一八二一〉刊、序文）

賣出しを祝して／あかねさす日かげも人の足なみも賑はふ天の岩戸屋が門

二代目振鷺亭即詠

（春亭三暁『光明真言誓仇討（こうみょうしんごんちかいのあだうち）』（文政四年刊、二十五丁ウ）

特に『十種香萩廻白露』の二代目振鷺亭の序文下には為永春水のものである花押が備わり、これらが間違いなく為永春水

の変名であることを示している。

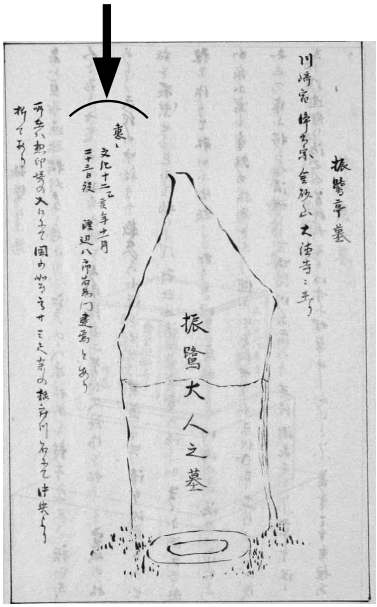
また、振鷺亭と為永春水の関係はただ単に春水が振鷺亭の名前を襲ったというだけにはとどまらない。既に若干の研究が備わる点ではあるが、振鷺亭が没する間際の作品群には、為永春水が「振鷺亭」名義を名乗ったうえで関与したと見られる作品が数点存在する。すなわち振鷺亭がいつ死んだかという時期が前後することによって、「振鷺亭」名義で書かれた作品群の中に、新たに為永春水の関与作を見出すことができるかもしれないのである。これは、振鷺亭の伝記研究として価値を持つことは勿論のこと、謎の多かった為永春水の前半生の著述活動を多少なりとも明らかにすることに繋がるのだ。ここに、振鷺亭の没年が議論されてきた理由の一端があると言える。本稿においては、そうした先行研究を踏まえて、現在有力視されている没年説に矛盾する資料を示したうえで、それを端緒として振鷺亭と為永春水の関連を探っていきたい。

一、小山田与清『擁書楼日記』の存在

先行研究の流れを概観すると、初め山崎氏によって文化四年説が支持されるが、その後神保氏がそれを否定し文政二年説が正しいことを述べ、棚橋氏がそれに続く。さらに、棚橋氏自身が自論を改める形で文化十二年説に鞍替えするという流れになっていることが分かる。またこのほか、『国書人名辞典』（一九九五年、岩波書店）・『読本事典』（二〇〇八年、笠間書院）では文化十二年、『日本国語大辞典第二版』（二〇〇一年、小学館）・『近世物之本江戸作者部類』（二〇一四年、岩波書店）では文政二年が振鷺亭の没年として採用されている。文化十二年説・文政二年説の両説入り乱れる状況であるものの、全体としては棚橋氏が唱える文化十二年説が最も有力であるとみなされているようだ。

では、なぜこの文化十二年説が確実なものと見なされるようになったのだろうか。それは棚橋氏が「振鷺亭年譜考」で紹介した山口豊山『夢跡集』（成立年不明、国立国会図書館蔵）の寄与するところが大きい。

【図】山口豊山『夢跡集』「戯作者の部」（成立年不明、国立国会図書館蔵[注1]）



この『夢跡集』とは、全二十八巻から成る写本であり、近世期の人物について、山口氏が実地調査を行い確認した墓碑のスケッチとその人物に関する簡単な情報がまとめられているものだ。『夢跡集』はさまざまな部立がなされ、そのうち十七巻「戯作者の部」に振鷺亭の墓碑のスケッチが収められている。

ここには、「振鷺大人之墓」と銘が彫られた墓石が描かれており、裏面に「文化十二乙亥年十一月二十三日没　渡辺八郎右衛門建焉とあり」と記載のあったことが示されている。また、墓碑のスケッチを取った時の状況も山口氏は後に書き残している。

これは天保（ママ）十二年の事で墓は矢張川崎の大徳寺にあります。其墓は墓地の入口へ寺子屋の弟子達が施主になつて根深石で正面に振鷺亭先生の墓としてあつたのですが、之れも三つに折れて墓地の諸所に散在して分なかつたのです。で寺僧に尋ねますと其処らに欠げて散らばつて居た筈ですと云ふ事なので、やつと探し出して継ぎ合はせて絵にとりました。（山口豊山「文学者の墳墓」『趣味』三巻十一号、一九〇八年）

棚橋氏はこの『夢跡集』の記述を重く見ており、文政二年説を支持していた「振鷺亭論――京伝絶筆以後の中本洒落本――」等での見解を改めて、文化十二年説を主張しているのである。

既に現存していないとはいえ、墓碑のスケッチと、さらにそれを写生した際の記録まで出てきた以上、墓碑に刻まれた「文化十二年十一月二十三日没」という振鷺亭の没年は揺るぎようのない事実であるように思われる。しかし、実はこの振鷺亭文化十二年没説と真っ向から食い違う資料が存在しているのだ。

それが小山田与清『擁書楼日記』（文化十二年七月二十九日起筆）である。

この『擁書楼日記』文化十三年七月十五日付の記事に次のような注目すべき記述がある。

十五日　晴　風　了阿法師佐藤佐五郎まうでく。高本竹妓がもとより彦左衛門といへる男をおこせたり。これ振鷺亭といへる戯作者也。

『夢跡集』によって明らかになった振鷺亭の「文化十二年十一月二十三日」という没年を踏まえたうえで、この「文化十三年七月十五日」の記事に書いてあることをそのままに理解すれば、文化十二年に死んだはずの人間が、その翌年に平然とその足で小山田与清のもとを訪れたことになってしまう。日記である以上、嘘や虚構を記すということも考えにくく、説明がつかない。

この明らかな矛盾を従来の先行研究はどのように取り扱っているのだろうか。『擁書楼日記』を踏まえたうえで振鷺亭の没年に言及している二つの先行研究を挙げる。

すなわち、振鷺亭は文化四年・文化十二年のいずれの年にも生存しており、文化十三年七月十五日には高田与清を擁書楼に訪れている。日記であるから、与清の記述はもとより疑うわけにはいかないからである。（神保五弥「振鷺亭と為永春水」、四一頁）

神保氏は文化十三年に振鷺亭が擁書楼を訪れたことを踏まえて、文政二年説こそが振鷺亭の没年であると述べる。ただこの時、もう一つの重要資料である『夢跡集』の存在は知られていないので、氏が『夢跡集』を踏まえた場合、どのような結論を出されたかは不明である。

猶、『擁書楼日記』（文化十二（ママ）年七月十五日の条）に

高本竹妓がもとより彦左衛門といへる男をおこせたり

これ振鷺亭といへる戯作者也

と見えるこれより、恐らく川崎から江戸へこの頃来ることがあったと思われる。俗名彦左衛門とは諸書の伝に見えないところである。猪狩彦左衛門がこの頃の通称であったと考えるが、これに該当する名も過去帳には見出せなかった。（棚橋正博「振鷺亭年譜考」、五九頁）

棚橋氏は、『擁書楼日記』・『夢跡集』の両資料の存在を念頭に置いているが、おそらく『夢跡集』の「文化十二年十一月二十三日」没という記述に引っ張られたのであろう、『擁書楼日記』の記事の年次を誤解されてしまったことで、この矛盾に気づかないでしまっている。つまり、先行研究においてはこの矛盾についての言及は行われず、「振鷺亭といへる戯作者」が誰なのかということも検討がなされていないのである。

二、高本竹妓の周辺人物
――閑月庵山暁・文亭綾継――

『夢跡集』のスケッチを含めた山口豊山氏の報告がある以上、振鷺亭の没年は文化十二年十一月二十三日と考えることが自然である。[注2] そうなると、問題になるのは『擁書楼日記』に登場する「振鷺亭といへる戯作者」の正体である。なぜなら、文化十二年に振鷺亭が死去しているなら、文化十三年に小山田与清を訪れた「振鷺亭といへる戯作者」は別人の可能性があるためだ。

そこで今回俎上にあげたいのは、「振鷺亭といへる戯作者」が、すなわち為永春水であるという仮説である。なぜなら、初代振鷺亭没後に為永春水が振鷺亭の名を襲っており、彼が小山田与清のもとを訪れたと考えれば説明がつくためである。ただ春水は、本名鷦鷯貞高、通称越前屋長次郎であるとされており、『擁書楼日記』にある「振鷺亭といへる戯作者」の通称と見られる「彦左衛門」の名はない。ただそれは振鷺亭も同じことである。振鷺亭の通称は与兵衛であり、「彦左衛門」の名は残されていない。

そこで「彦左衛門」という名前による人物の措定はひとまず脇に置き、別の角度から仮説を検証していきたい。その際、大きな手掛かりとしたのは「振鷺亭」を小山田与清のもとによこしたという「高本竹妓」という人物である。というのは、「高本竹妓」の紹介で小山田与清のもとを訪れたということは、「振鷺亭といへる戯作者」は竹妓と知己の間柄にある人物であり、竹妓の周辺人物を見ていくことが「振鷺亭といへる戯作者」の正体に繋がると考えたためだ。

まず高本竹妓がいかなる人物か、『国書人名辞典』を参考に挙げよう。

俳人　〔生没〕天明六年（一七八六）生、文政十一年（一八二八）六月二十三日没。四十三歳。〔名号〕高木（ママ）氏。名、康将。通称、重右衛門。号、初め群人、のち竹妓・閑月庵・竹心斎。〔経歴〕江戸の人。寥松門。

この竹妓とその周辺の人物を探るうえで、重要な資料として『紫苑（しおん）の露（つゆ）』という俳諧句集が挙げられるだろう。次に、基礎的な情報をまとめた。

○二世閑月菴山暁編『紫苑の露』

・底本　早稲田大学図書館蔵本（「早稲田大学古典籍総合データベース」より閲覧）

・巻冊　半紙本一冊

・序末　「文政十一年戊子仲秋（＝一八二八年）印（風解／山

人）印（杉舎／桂素）」

・跋末　「二世閑月菴山暁跋　文政十一年戊子仲秋　印　印」

・備考　①跋文から、本書は閑月庵竹妓（＝高本竹妓）の追善句集である。

②巻頭に「閑月庵竹妓居士」の肖像画と、「高本竹妓居士畧傳」を備える。

加えて、本資料の序・跋文を抜粋して記す。（翻刻・傍線、筆者）

紫苑（はい）の露序

（中略）閑月老人の門弟、竹心庵山暁は、をしへをうくること多年ならねど、よくその尊きを尊んで、つねに師につかふるのみちを尽すものゆへ、竹妓、黄泉に帰りてのちを、それが遺言のおもむきにまかせ、閑月庵二世のあるじとなりつ。（中略）その袖しほる花のつゆは、はいかいの浄土にとゞき、一味のあめとふりもすべしと、無乱閑人桂素秋光庵の窓下に明月を燭とて、懐旧の涙を墨池にうかめて序す。

文政十一年戊子仲秋　印（風解／山人）印（杉舎／桂素）

むさし野のひろくおほいなる先師の教恩にむくはむとて、追善の一集をおもひおこし、おのれがつたなき手向草によりて、これを紫苑の露と名づけ（中略）

二世閑月菴山暁跋　文政十一年戊子仲秋　印　印

序跋文等を参考にすると、『紫苑の露』は竹妓の追善句集であることが分かる。巻頭に「閑月庵竹妓居士」の肖像画を備えていることに加えて、跋文によって「先師（＝竹妓）の教恩」に報いるために『紫苑の露』が編まれたことが読み取れる。

さらに、本句集からは竹妓に近しい人物として、序文を寄せた「桂素秋光庵」「風解山人」「杉舎桂素」と名乗る人物、跋文を寄せた「二世閑月庵山暁」と名乗る人物がいるということが分かる。特に閑月庵山暁は、竹妓の跡を継いで閑月庵を名乗り、本句集の編纂に中心となって当たったようだ。

竹妓の周辺人物と目されるこの二者はどういった人物であるのか。辞書的な記述にはなってしまうが次に示したい。まずは閑月庵山暁について『国書人名辞典』の項を挙げて、その略歴を簡単に紹介しておく。

俳人〔生没〕生没年未詳。江戸時代後期の人。〔名号〕川村氏。通称、日野屋三右衛門。号、山暁・正風堂・閑月庵・俳阿弥。〔経歴〕江戸の人。横山町に住す。寥松門。

続いて桂素秋光庵・風解山人・杉舎桂素であるが、この時期にこういった号を使用していたのは、「文亭綾継」という人

物である。文亭綾継がどのような人物かについては『日本古典文学大辞典』（神保五弥氏執筆）より引用する。

人情本作者。本名は宮崎又兵衛。俳号・狂歌名は秋光庵、また桂素。寒葉斎とも号し、天保末年（一八四四）は風解山人とも号していたようである。〈報仇絵本高尾外伝・序〉。江戸日本橋横山町の薬種・砂糖問屋大坂屋の主人。明治十一年（一八七八）四月五日没〈狂歌人名辞書〉、享年未詳。【事績】伊勢の神官で国学者の足代弘訓の門人で、狂歌・俳諧に学び、また片歌を弘めようともしていた〈広益諸家人名録・二編、出世娘・初編序、萩の枝折・前編〉。為永春水の幼少時からの友人で、文政年間には同行の仲間と文亭連を組織し、文政八年（一八二五）刊（推定）の春水人情本『菊廼井草紙』初編あたりから、春水人情本の代作・助作に一時かかわっている。（中略）春水人情本のいくつかの作品中の記述や、『報仇絵本高尾外伝』（天保十四（一八四三）年刊）の春水序文から、春水の没時まで交友関係が続いていたことが確認される。（下略）

ここでは、風解散人の号を使用するのは天保末年頃とあるが、『紫苑の露』を見る限り、文政年間から既に風解散人を名乗っていたものと見られる。

さて、ここで注目すべきは文亭綾継の記述である。竹妓の追善句集『紫苑の露』に序文を寄せていた綾継は、実は「為永春水の幼少時からの友人」で「春水の没時まで交友関係が続いて」おり、なおかつ「春水人情本の代作・助作に一時かかわっ」たという極めて春水と関係性が深い人物であったのである。[注3]

また、それだけではない。同じく竹妓に近い人物である閑月庵山暁も為永春水と関係を持っていた。例えば、為永春水作『風月花情（ふうげつかじょう）／春告鳥（はるつげとり）』には次のような文章がある。

① 元来楽なる若隠居、迎嶋の別荘より渡りに舟も自由にて、竹屋を呼す向ふ越。今宵は昼より誹諧のもよふし客にて文亭を会頭とたのみ、閑月庵を催主にて、終日夜に入までかゝりしかば、（下略）（『風月花情（ふうげつかじょう）／春告鳥（はるつげとり）』天保八年〈一八三七〉刊、巻之二第三章）

この場面は鳥雅が若隠居生活を決め込んでいる生活を描写した場面なのだが、ここに俳句の会を取り仕切る「催主」として「閑月庵」が登場している。『新編日本古典文学全集』の頭注で指摘されるところではあるが、[注4]ここに登場する閑月庵は、閑月庵を継いだ山暁である。また本箇所には「文亭」という名で綾継もセットで登場している。

三、「振鷺亭といへる戯作者」の正体
――山暁・綾継と春水の繋がり――

前節で竹妓の周辺人物として、山暁・綾継という二人の人物を指摘し、彼らと春水との間に繋がりがあることを示した。今節ではさらに、実際に春水と山暁・綾継との関係が伺える用例を羅列する。なお用例は分かっている限りで刊行・成立の年代順に並べてある。

② 不僕ハ莫逆の友にして。餝らぬ言葉が竹馬のよしミ。本にくるしむ越長が。其身の上のあらましを。いハばかたらバ衣売し頃より一向書好む。（中略）横山町の文亭綾継。筆を橘街の教訓亭に採る。（『明烏後正夢』六編〔『寝覚繰言』初編〕文政八年〈一八二五〉刊か、文亭綾継序）

③ 二夜とかゝらぬ急作ながら、盛衰栄枯をうつせし事、鏡にかけたるごとくにして、勧善懲悪明らかなれば、世の婦女子が雨夜のつれ〴〵、男の品定にこれを替なば、教訓の一助ともならんと、うしのいばりの長文しるして、此本の發市牛に汗せよと寿くものす　横山町の／文亭綾継干時文政乙酉初冬／書肆がたのみに来りし折から楚満人が庵にあそびて狂訓亭の南窓に序す（『寒紅丑の日待　第二輯』文政九年〈一八二六〉刊、文亭綾継序）

④ 悟決「モシ、先頃ね、大阪屋の旦那が、好いのを言ひやした。孝次さんは世界中の女が、皆戀病に煩ふのだが、彼様いふ仁心な方だから、其の分を一人で病ふさ。實に違えは御座えせん」孝次郎「文亭公か。彼の人は片哥の事を、悉く論らつて、萬葉から引いて、書籍も大きに好く著してあるが、まだ版にはならねえが、彼れが何れ大功なことさ」（『秋色染話／萩の枝折』文政年間刊、前編巻之二第二回）

⑤ 寒葉斎綾継は中興戯作の冠と称せられし古人綾足の正統なり。俳諧に遊んで秋光庵桂素といふ。また伊勢の神官足代弘訓の門人となりてかた哥を弘む。（中略）暑をさけんよしをいひて彼人をかたらへば文亭主人〈秋光庵の／吏なり〉よろこびて閑月庵山暁主人をいざなひ朝とく出て滝の川にいたりしが（下略）（『貞孝節義／出世娘』天保六年〈一八三五〉序、自序）

⑥ 鳥居の陰から聲高く、英泉楚満人しばらく待れよ、風解山人見参せんと、しづ〳〵出る一個の若者、敵か味方か但し又作の怠惰の催促かと見れば、友人綾継ぬしなり。餘りの事にあきれるゝとんだ茶釜と吹出せば文亭莞爾と

打笑（下略）（『報仇高尾外伝』天保十四年〈一八四三〉序、自序）

全体的には文亭綾継の登場数が多いようだ。幾つか代表的なものを調査した限りでこれだけのものが出てきたため、おそらく未調査の春水作品を含めれば、より多くの山暁と綾継の登場例が見られるだろう。一つ一つの用例の場面説明などはしないが、単に序文を寄せている例（②③）や春水の自序の中で友人として登場する例（⑤⑥）だけではなく、作中への登場例（①④）も確認できる。

さて、春水と竹妓の両者を結ぶ繋がりとして、山暁・綾継の存在を指摘した。今一度経緯を振り返ると、山暁と綾継は竹妓の追善句集である『紫苑の露』に序文・跋文を送った人物であり、竹妓と関係があった。さらに、山暁と綾継の両者は竹妓だけではなく、春水とも交流がある人物だった。具体的には春水作品に序を寄せる、春水自序や作品内への登場といった形で、彼らの間に密接な関係性があったことが伺えた。特に綾継に関しては、春水の幼少時から没する直前まで交友のある人物だったと知れる。

これらのことを踏まえると、仲の良かった山暁・綾継を通じて、春水と竹妓の間にも何らかの関係性があったのではないかという推論が成り立つ。その関係性というのが、例えば、竹妓門下の中に春水自身が含まれていたのかどうかということは現時点で定かではない。竹妓編纂の句集や『紫苑の露』の中に春水が句を寄せていたならば、はっきりとそのあたりのことが解明できそうなのだが、確認できた範囲では春水が名乗っていたことが知られる号・本名・通称のいずれも確認することが出来なかった。ただ、この二人を媒介として、春水と竹妓の間に繋がりがあった可能性は高いと考えている。

かなり大回りをしつつも、春水と竹妓の間に繋がりがあったことを立証してきた。そうすると、問題にしていた『擁書楼日記』の「高本竹妓がもとより」よこされてきたという「振鷺亭といへる戯作者」は二代目振鷺亭、すなわち為永春水を指すとした仮説はかなり可能性の高いものと言えるだろう。

そして、この『擁書楼日記』「振鷺亭といへる戯作者」の正体が春水だとすると、文化十二年に没した振鷺亭が、文化十三年に小山田与清を訪れたという矛盾も解決する。振鷺亭が文化十二年十一月二十三日に没したのちに、為永春水が振鷺亭の名を襲う。文化十三年七月十五日に春水は、閑月庵山暁・文亭綾継を通じて関係のあった高本竹妓の紹介で小山田与清のもとを訪れ、「振鷺亭」を名乗り、それが『擁書楼日記』の記述として今に残る、と考えればすんなりと理解できるのである。

四、振鷺亭名義作品への疑義

これまで、文化十二年没説に矛盾する小山田与清『擁書楼日記』の記述を検討し、そこに現れる「振鷺亭といへる戯作者」が春水である可能性が高いことを述べた。『擁書楼日記』の記述が文化十三年七月十五日のものであることを踏まえると、気になるのは振鷺亭の没後に刊行された作品群はいったい誰の手によるものなのかという問題である。ことをあくまで素直に受け取るならば、それらは全て「二世振鷺亭」を名乗る春水の関与作ということになるだろうが、当然ながら、振鷺亭が生前に書き溜めたものを没後に遺作として刊行するということもあり得るだろう。

そこでここからは振鷺亭の没後に刊行されたことがはっきりとしている作品について、それが振鷺亭作のものであるのか、春水が関与しているものであるのかを検討していきたい。

まずはじめに振鷺亭の没後に刊行がなされた振鷺亭名義の作品を次の表にまとめた。

文政元	文化十四		文化十三		
1818	1817		1816		
曠世奇談	ぶつかけ南蛮療治	世事第一口軽業	寒紅丑の日待	大時代唐土化物	実語教童子教証註
振鷺亭作	振鷺亭作	振鷺亭作	振鷺亭主人著	振鷺亭作	江都振鷺亭貞居著
月光亭墨仙〔牧墨遷〕	勝川春亭	一円斎国丸〔歌川国丸〕		勝川春亭	
半紙本	中本	中本	中本	中本	大本
	2巻	2巻	2巻	3巻	
5冊	1冊	2冊	2冊	1冊	1冊
山城屋佐兵衛／角丸屋甚助／松屋善兵衛／河内屋長兵衛／秋田屋太右衛門	鶴屋喜右衛門	鶴屋喜右衛門	上総屋忠助／村田屋次郎兵衛	鶴屋喜右衛門	山田佐助／北島長四郎／英平吉郎／角丸屋甚助／上総屋利兵衛
読本	合巻	合巻	洒落本	合巻	教訓

続いて、これらの作品についての先行研究でのこれまでの取り扱いを振り返りたい。振鷺亭の没年間際の作品群に春水関与作が含まれているという論点は、既に幾人かの研究者が述べる点であり、その見解を踏まえたうえで自らの検討に移ることとする。

かなりはっきりと、振鷺亭のものではなく春水が関与したとされる作品と断定されてきたものとして、『曠世奇談（こうせいきだん）』（文政元年刊）が挙げられる。本作は森島中良『珀掌奇談』（寛政四年刊）の改題改刻再板本に過ぎず、おそらく振鷺亭が没し

たことに乗じて、名義を借りて出版されたものであり、春水の関与が濃厚であるとされている。

刊年不明のため先ほどの表には掲載していないが、ここに付け加える形で春水が関与した振鷺亭名義作品であるとほとんど確定しているものとして、『滑稽鄙談息子気質』（刊年不明）、『新板増補名代町法記』（刊年不明）がある。このほか、春水関与のものであるか、という疑問符が投げかけられている状態の作品としては、合巻作品である『大時代唐土化物』『世事第一口軽業』『ぶつかけ南蛮療治』があたる。[注6]

簡単に先行研究をまとめたが、ここからは、具体的に表に掲載した文化十三年以降刊行の作品群の検討に移る。なお、『大時代唐土化物』（文化十三年刊）[注7]、『ぶつかけ南蛮療治』（文化十四年刊）[注8]の二作は調査不足のため、その進展のみを注に記すこととした。また既に先行研究で結論の出された『曠世奇談』（文政元年刊）は言及自体を省略する。

さてまず、ほとんど間違いなく振鷺亭の著作だと見なせるものを指摘する。一つは『実語教童子教証註』（文化十三年刊）である。本書の跋文には「振鷺亭先生、嘗閑素をもとめ、江都をのがれて、武の多摩川の辺に庵室を示し、一円窓下に村童を集め、習しむるに、実語童子の二教を以てす」とあり、これは振鷺亭が落魄して川崎付近で生活を送っていたという略伝と一致する。また本書が、略伝にもあるように、振鷺亭がその地で手習の師匠をしていた教えを弟子がまとめたものと考えれば春水の関与は見られないと判断しても良さそうだ。もう一つは、『寒紅丑の日待』（文化十三年刊）である。本作の序文署名は「時文化丙子孟春題二于塩浜別邸一円窓下一　振鷺亭主人」[注9]とあり、この序が「塩浜別邸」で記されたものだと明示される。塩浜というのは、振鷺亭が没落した後に移り住んだ川崎大師河原付近の地名であり、振鷺亭自身が著したものであると考えられるのだ。このことから本作も振鷺亭の作品だと判断する。

春水の関与がある可能性が最も高いと認められる作品として『世事第一口軽業』（文化十四年刊）がある。注目したのは次の箇所だ。

まづは尾花才三郎もとゆひわたりをごらんにいれますが、このげいとうはかみそりをさかてにもつてわたりますゆへ、いたつてあぶなふござります。ちよつとでも手がそれますときります。（中略）「もふし〳〵才三さん、おまへとわたしがそのなかは、きのふやけふのことかひな、ひさしくならあ、いつぽんかへしな

（振鷺亭『世事第一口軽業』文化十四年〈一八一七〉刊、八丁ウ・九丁オ）

この尾花才三郎という人物は実在の人物ではなく、『恋娘昔八丈』という浄瑠璃に登場する架空の人物である。松貫四・吉田角丸合作『恋娘昔八丈』は安永四年（一七七五）初演の人形浄瑠璃作品である。作中で尾花才三郎はもとは荻原家に仕える若侍であったが、主君の弟・千種之介が奪われてしまった香箱の行方を、その下手人である丈八・喜蔵の行方とともに探るために、一時期髪結に身をやつして市井に暮らしていた。

この『恋娘昔八丈』は初演時から評判が高かったことで知られており、その後繰り返し上演がされており、歌舞伎としても脚本化され演じられている。さらに、この歌舞伎『恋娘昔八丈』を書き替えた歌舞伎脚本も後に出てきており、『桃柳娘雛形』（寛政七年〈一七九五〉初演）と福森久助作『褄重噂菊月』（文化十三年〈一八一六〉初演）の二作がそれに当たる。

特に『褄重噂菊月』は『歌舞伎年表』で調べた結果、文化十三年九月十二日に中村座初演が演じられており、振鷺亭没後から『世事第一口軽業』刊行までの一年の間の出来事だったことが分かる。また、登場人物を確認すると、当然と言えば当然なのだが、「髪結才三郎」が登場し、その役を五代目松本幸四郎が演じていたことも判明した。

『褄重噂菊月』の当時における評判は、翌年刊行の三世八文字屋自笑『役者名物合』（文化十四年〈一八一七〉刊）から分かる。

おこま二十五六の中としま美しい事、香箱を取かへさんと才三とのぬれごと。喜蔵のむこ入に継親庄兵衛のよくばりに、我身のつまり才三が持た香箱を取んとさしころしたと思ひの外に、亭主の喜蔵を殺した悪名になわめのはりつけ、生の物を生で見せるはりつけのおこまには見物も肝をつぶし驚き入て無言なり。少しはしら下るとどうぬけの早業、びやうぶとへんじ、かけ物とかはり、香花茶湯の仕かけ古今の評判。（中略）此節、古人松掾一周忌追善狂言の大當り。（中略）仕掛の大出来古今の大入、きめう〳〵と見物もほつとためいきをつきました（三世八文字屋自笑『役者名物合』文化十四年〈一八一七〉刊、立役の部・尾上菊五郎）

これを見ると、『褄重噂菊月』がかなりの評判を呼んだ当たり作であったことが読み取れる。またその筋立ては、上演と同じ年の六月に江戸で起こった「亭主殺し」の一件を組み込み、江戸の人々の関心を買ったことが想像される。

加えて、『歌舞伎年表』には『褄重噂菊月』の上演に際して、

九月二十一日、両番所より狂言本持参にて罷出べし勘三郎に沙汰。二十二日出でし、二番目狂言（筆者注、『褄重噂菊月』のこと）の内相改、仕来りの仕組に致べしと命ぜられ、翌日より「昔八丈」に改む。（『歌舞伎年表　第六巻：文化十三年――嘉永六年』一九六一年、岩波書店、一六頁）

といったような出来事があったことが記されている。おそらく、当代の事件をあまりに露骨に扱ってしまったことが原因と思われるが、奉行所の命によって『褄重噂菊月』は従来の『恋娘昔八丈』に改めて再演することとなってしまったのだ。そういった意味でも、当時の人々の耳目を集める作品だったと言えよう。

以上を踏まえると、文化十四年刊行の『世事第一口軽業』は、『褄重噂菊月』の大当たりという文化十三年の出来事を背景として、作中の一趣向として「尾花才三郎」を登場させたのではないかと考えられるのだ。このことはすなわち、振鷺亭以外の誰か、ここではおそらく春水の手によって本作が成されたのではないかということに繋がる。あくまで可能性が高いというレベルに過ぎないことは承知の上だが、以上のような検討から、本作を振鷺亭の手によるものでなく春水の関与が疑われる作品としたい。

まとめ

ここまで、振鷺亭が文化十二年に没したという通説と矛盾する資料『擁書楼日記』の検討を行い、その中に登場する「振鷺亭といへる戯作者」が為永春水である可能性が高いことを指摘した。このことによって、振鷺亭の伝記研究として、文化十二年没説という通説がより蓋然性の高いものであることが示されたことに加えて、春水の前半生を考えるうえでも多少の寄与が出来たのではないかと考えている。具体的には、「彦左衛門」という通称の存在や、文化十三年時点から振鷺亭名義で活動していた可能性を提示したということである。ただし、現時点ではこのように結論付けたが、「振鷺亭といへる戯作者」が振鷺亭でも春水でもない、第三者であるという可能性が残っていることも念頭に入れなければならないだろう。

また、文化十三年以降の振鷺亭名義の作品に春水作が混じっているのではないかという疑問についても、各作品に即して検討を行った。その結果、以下のような結論を導くに至った。

○振鷺亭作の可能性が高いもの→文化十三年刊『実語教童子教証註』、『寒紅丑の日待』

○春水作の可能性が高いもの　→文化十四年刊『世事第一

口軽業』

先行研究でも判断を保留する作品が多い中、作品内部の情報から判断を下すことには慎重さが求められる。今回は触れることが出来なかった作品と併せて、今後の課題として取り組みたい。

振鷺亭は従来の研究史上で、評価が高いとは言えない作家である。しかし為永春水は、一時期の間二世振鷺亭を名乗り、幾つかの振鷺亭作品を後になって改題再板するなど[注10]、振鷺亭に対して一定の評価をしていることが伺える。

その理由はどこにあるのか。振鷺亭の評価を再考するうえでこの問いの答えを考えることは非常に重要なことであると思う。振鷺亭と春水の関係を伝記的側面から検討した本稿は、その前段階として文学史上の振鷺亭の位置づけを捉え直す一助になるのではないかと考えている。

使用テキスト

- 『江戸時代戯曲小説通志』『戯曲小説通志三版』（一九一九年、誠之堂書店）
- 『増補続青本年表』『新群書類従』第七・書目（一九〇六年、東京活版株式会社）
- 『狂歌人名辞書』『狂歌人名辞書』（一九二八年、横尾文行堂）
- 『戯作者考補遺』『戯作者考補遺』（一九三五年、国本出版社）
- 『戯作者小伝』『燕石十種』第一（一九〇七年、国書刊行会）
- 『十種香萩廻白露』国立国会図書館蔵本（207-819）
- 『光明真言誓仇討』国立国会図書館蔵本（207-1227）
- 『夢跡集』国立国会図書館蔵本（863-226）
- 『擁書楼日記』早稲田大学図書館蔵本（ヌ06 05756）
- 『紫苑の露』国立国会図書館蔵本（文庫18 00818）
- 『風月花情／春告鳥』『新編日本古典文学全集』80『洒落本：滑稽本：人情本』（二〇〇〇年、小学館）
- 「明烏後正夢」棚橋正博「〈翻〉人情本論（十二）――『明烏後正夢』六編（『寝覚繰言』初編）――）」（『帝京大学文学部紀要　日本文化学』四〇巻、二〇〇九年）
- 『寒紅丑の日待　第二輯』名古屋市蓬左文庫蔵本（尾12-267）
- 『秋色染話／萩の枝折』『錦帯屋雪白木屋軒並娘八丈：秋色染話萩の枝折』（一九一六年、人情本刊行会）
- 『貞孝節義／出世娘』立命館大学アートリサーチセンター蔵本（hayBK03-0683-01）
- 『報仇高尾外伝』早稲田大学図書館蔵本（く13 03018）
- 『実語教童子教証註』架蔵本
- 『寒紅丑の日待』国立国会図書館蔵本（京-277）
- 『世事第一口軽業』架蔵本
- 『役者名物合』早稲田大学図書館蔵本（チ13 03849 0079）

注

注1　「国立国会図書館デジタルコレクション」より引用
http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2568620?tocOpened=1 863-226、[17]、22コマ

注2

振鷺亭の没年が文化十二年である蓋然性が高いことを示す参考資料として、瀬川富三郎編『江戸方角分』（文政元年成立、写、国立国会図書館蔵太田南畝奥書本）が存する。本書は芸に秀でた当時の江戸の諸家を住所によって分類し、号や俗称を記した人名録である。またその奥書に「文政元年七月五日竹本氏写来七十翁蜀山人」とあり、文政元年に書写されたものであることが分かる。

本書の特徴の一つに、故人の名前の右上に「丁」という物故印が記されるという点が挙げられる。本書には振鷺亭も「日本橋住」の「戯作者」として立項があり、物故印が付されているのである（下図参照）。このことから、振鷺亭は本書が書写された文政元年段階で既に没していた可能性が高いと言える。つまり、文化十二年説・文政二年説の両説に照らすと、文政二年説は本書の物故印と齟齬が生じてしまうため考えにくく、文化十二年説の方が可能性が高いということになるのである。

ただ、本書は写本という性質上、その書入れが文政元年の書写の段階で行われたものなのか、それともその後の時代に行われたものなのかの判断がつきにくい。試しに本書の物故印が付された人物の没年を調査したところ、判明した一一九人（全二二〇人の内）の中で書写日の後に没していた人物が十名いた。最も遅いもので千代有員の嘉永三年（一八五〇）で、書写されてからかなり時間が経っても、書入れが行われていたことが分かる。振鷺亭もまた同様に、文政元年の書写後に物故印が付された可能性を払拭することはできない。そのため、振鷺亭の没年を明らかにするという意味での本書の位置づけは参考資料程度に留まると判断せざるを得ない。

（「国立国会図書館デジタルコレクション」より引用 http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2542002　本別118-20、6コマ）

注3

山杢誠「為永春水年譜稿　その四」（『東洋大学大学院紀要（文学研究科）』第三十二集、一九九六年）で、山杢氏は文政七年の項目に「文亭綾継ら文亭連と親交を持つか」との条を記している。ただ、山杢氏は文亭綾継の名前が「文政七年秋頃から春水作品に現れる」（一三三頁）ことを根拠にそう述べられているが、神保氏が『日本古典文学大辞典』の文亭綾継の項に執筆されたように、綾継と春水の関連自体はもっと古くからあったのではないかと考えられる。というのは、後述の用例②『明烏後正夢』六編序に綾継自身の言葉として「不僕ハ莫逆の友にして。餝らぬ言葉が竹馬のよしミ」とあるためである。

注4

『春告鳥』（新編日本古典文学全集80『人情本・滑稽本・洒落本』小学館、二〇〇三年、三九三頁）

注5

『滑稽鄙談息子気質』については、神保五弥「振鷺亭と為永春水」に詳しい。また、『新板増補名代町法記』は中野三敏氏が『洒落本大成』第二十二巻（一九八四年、中央公論社）の解題で疑義を述べられている。加えて、棚橋正博氏も「振鷺亭年譜考」で、本書の「振鷺亭丁子匂人」という署名から、春水が売り出す「丁子車」という化粧品をかすめたものとして、春水の関与の可能性を指摘している。

注6　神保五弥「振鷺亭と為永春水」では、文政年度の春水合巻の中には、主要登場人物が途中で立ち消えするといった構成上の破綻がしばしば見られることを指摘する。そのうえで、振鷺亭の文化十二年刊『新春草紙顔見世』・『芝居好家内安全』までは複雑な構想を破綻なく紙面内に収めきるが、同じく文化十二年刊行の『哆々嘮々草』以降になると、思い付きの趣向で笑いを取るような単純な構想に変化することから、この『哆々嘮々草』あたりから春水が関与しているのではないかと述べられている。『大時代唐土化物』『世事第一口軽業』『ぶつかけ南蛮療治』は通読すると、神保氏の指摘するような、その時々の趣向で笑いを取る単純な構想から生まれた作品に当てはまる。

注7　『大時代唐土化物』の序文は次のようなものであり、厄除けの神である「鍾馗」に、荒事を得意とする市川団十郎が「怨敵退治」をする様子を重ねて趣向とした旨を記す。

宝井其角が鍾馗の自画賛を覧はべりしに

今こゝに団十郎や鬼は外

といへる発句なり。夫鍾馗は疫鬼を譲（ママ）ふの術あり。俳優団十郎は其名高く、異域に聞ゆ。就中英武勇者の所作に妙を得て、怨敵退治の分形を芸とす。鍾馗の邪気を退くの事によく肖たれば、これを賞したる。晋子が当意即妙の作意、彼此を感じて、此策子の趣向とはなしぬ。

団十郎と振鷺亭と言えば、振鷺亭は五代目市川団十郎から『風俗本朝別女伝』（寛政十年刊）に序文を寄せられる、三枡連の句集に振鷺亭作品が入集するなど関連が見られる。そのため、本作をその延長線上にとらえて、振鷺亭本人の作と考えることもできる。

ただ、同年刊行の合巻作品を見渡すと、本作と似たような趣向で仕立て上げられ挿絵も類似する東西庵南北作『化納歌右衛門草紙』や、「今こゝに団十郎や鬼は外」の句を見返しに持つ山東京伝作『琴声美人伝』等があり、団十郎を題材にしたからといって振鷺亭の作とみなすことは難しそうである。本書については序文や趣向といったレベルでは振鷺亭のものか否かの判断ができず、現時点では保留としたい。

注8　『ぶつかけ南蛮療治』は、筆者未見のため調査が至っていない。日本古典籍総合目録データベースを参照すると、天理大学附属天理図書館に所蔵となっているが、同図書館の蔵書検索では該当がない。棚橋氏は「振鷺亭年譜考」の中で、本作の内容について触れているため、現存していることははっきりするが、どこの本を見たのかまでは記していなかった。

注9　「文化丙子」は、文化十三年のことで間違いない。この序文は振鷺亭自序であるため、必然、振鷺亭が文化十三年まで存命だったことの証明になりうるのではないかという疑問が浮かんでくる。ただ振鷺亭の死は、馬琴が後に記したように、酒に酔った末、溺死するという突然の出来事だった。

又酒落本には寛政の初、振鷺亭〔俗称を忘れたり。初は浜町に居れり、家主の子なり。後に流浪して川崎駅に僑居し、酔て入水してみまかれり〕其他の作者数輩ありといへども、京伝の作抜萃して、賞翫大かたならざりけり。

（曲亭馬琴『伊波伝毛記』文政二年〈一八一九〉成立）

注10　そのことを考えると、来年春の売り出しに合わせて序文の年次を文化十三年に設定していたが、その後振鷺亭が突然死してしまったため、手直しされることなくそのまま刊行されてしまった可能性が高いと考える。

振鷺亭作『いろは酔故伝』（寛政六年〈一七九四〉刊）を文政

三年（一八二〇）に『建久酔故伝』と改題改修、振鷺亭作『夕霧一代記』（寛政七年〈一七九五〉）を文政五年（一八二二）に『全盛葉南志』と改題再刻している。

（おおむた　たくみ・本学大学院修士課程修了生）